

「IOC スポーツ文化」と「ヴェール文化」との葛藤と共存性
ーイスラーム女性スポーツ大会の開催をめぐるー

学習院女子大学 荒井啓子

「IOC スポーツ文化」（寒川、2015）と「ヴェール文化」つまりイスラームのもつ「被覆される身体の文化性」との葛藤が続いている。

2012 年に開催された第 30 回オリンピック夏季大会（ロンドン）において、参加した 204 のすべての国と地域からはじめて男女両方の選手が出場した。これはヴェール着用の条件をもとにサウジアラビア、カタール、ブルネイの 3 か国の女性選手の初参加によって実現したものであり、「近代スポーツ」が新たな「国際スポーツ」としてヴェール着用の許容したかのように見えた。しかし、他方、イラン女子サッカーチームはロンドン大会予選においてヴェールの着用が国際サッカー連盟（FIFA）からの許可が下りず出場が認められなかった。2016 年開催のリオデジャネイロ大会予選においても同様であった。競技種目の特性によっては、あるいはヴェール着用の仕様によっては、未だ女性のオリンピック大会出場には難しい側面がある。

オリンピックに出場する限りは現代のこの国際スポーツ化した「近代スポーツ」の種目特性を優先するべきであるという見解もあると考えられるが、他方、オリンピックの理念である異文化理解をどのように解釈し、それとどのように折り合いをつけていくかという課題も見出される。「近代スポーツ」に端を発しその要素を包含しながらも独自のスポーツ文化を作り上げて来たオリンピックが多様性や個の尊重を謳い、単に国際化ではなくグローバル化を標榜するのであれば、この課題は看過することはできないであろう。ここに本研究の問題を見出している。

そこで、上記の問題を解き明かすために、本研究では、イランにおいて開催された（1993 年～2005 年：全 4 回）「イスラーム諸国女性スポーツ大会」（Islamic Countries Women Sports Games⇒第 3 回より Moslem Women Games）に着目し、その開催意図及び第 1 回から第 4 回までの開催プロセスを検証し、その上で、とりわけ、この大会によってイラン女性がイスラーム文化を前提としつつもオリンピックへの参入を期待し続けてきたであろう足跡（葛藤）を辿ることによって、ヴェール着用＝「被覆される身体の文化性」と「IOC スポーツ文化」との共存性を模索することを目的とする。オリンピックにおいてヴェール着用によるパフォーマンスの何が問題なのか、また、「近代スポーツ」の種目特性を踏襲・包含しつつも時代を経て「IOC スポーツ文化」とも呼ばれる独自の「国際スポーツ」として広く展開されるオリンピックが文化の多様性や個の尊重とどのように折り合いを付けることが出来るのか、という命題のもとに「オリンピズムの根本原則」の解釈にも接近したい。